

希薄な友達関係

人と関わりづらい、クラスに入るとすごく緊張する、気楽に声をかける友達がいない……。このところの面談で、そんな言葉が頻繁に出てきます。

愛着アプローチ（アタッチメント）から分析すると、生まれてから3歳ころまでに形成される親子間の基本的信頼感が十分でない場合に、思春期後にそうした症状が出やすいと言われますが、それだけではないように思います。

静岡市内のある精神科医の先生がホームページで述べていました。名前も年齢も職業も知らないのに、「私の彼」と言う少女。僕の部屋に来てるのに、僕の本棚の漫画を読んだり、それぞれ持ってきたゲーム機に夢中になり、一言も交わさず帰っていく「友達」がいると言う少年たち。「友だち地獄」（土井隆義著）に書かれていますが、SNSで繋がっていても機種変更を機にメンバーを平気で切る昨今の若者たち。

危機管理の問題からか、すっかりなくなった中学校のキャンプに、小学校の林間学校。小中学校の授業で「班学習」もなくなっていると聞きます。少子化を理由になくなっていく地区の運動会。すっかり聞かなくなった「青年団」。「老人会」に食い込む「壮年会」。友達関係ばかりか、地域の繋がりも希薄になっています。新型コロナウイルス禍で、村や地区の祭りや地域の伝統祭りも相次いで中止、「密な人間関係」は避けられていました。

しかし、私たちが特に2001年のNPO法人化でより盛んに行ってきた同世代の仲間たちとのキャンプや交流合宿、野外体験活動で築かれた「密な人間関係」は、「人との関わりづらさ」を克服し、多くの不登校や引きこもりを解消してきました。

「密な人間関係」は、何もそうした行事だけで築かれるものではありません。ちょっと勇気を出して、「ねえ、君」と「友達」のことをもうちょっと知ろうとする行動から会話が生まれ、お互いの思いや考えを言い合ったら、自分ってこんなところがあったんだと少し知ることにもなります。そして、自分の興味のある行動に誘い、行動を共にしてきたら、そうした関わりの中から「仲間と群れ集う楽しさ」を体得していきます。気が付いたら、君はもう「密な」仲間たちの中にいるでしょう